

東京・港区に 漆器病院

漆器というと大切にせず、とがく宝の持ち腐れになりがちですが、高価な品だけに傷ついたり変色したり、どこで修理したらよいか分からないまましまいい込む、というのもうなすけません。そんな声にこたえて、東京・港区の全国伝統的工芸品センター内にこの八月から月一回、漆器病院がオープンしました。修理を希望して病院を訪れる人はひっきりなしで、診断役を引き受けている柴田康時さん（左）は、休む暇なしの繁忙ぶりです。

漆器は生きもの

「漆器は生きものです。だから傷むのは当然で、傷めば修理して使えばいいんです。ひび、欠け、色はげ……どんな傷み方でも、修理のきかないものはありません」と柴田さんは



の。変色したら塗り替え、ひびがはいったり、欠けても修理しながら使っていくのが漆器の扱い方だ。そうで、そうすれば百年でも使用出来る。輪島塗で有名な輪島市の一般家庭では、漆器は修理さえすれば新品同様になることを知っている。日用の器として気軽に使われている。

輪島市へ送られ修理

ひび、欠け、色はげ……何でも

☆☆☆☆
塗師家の診断で
しかし生産地以外に住む

消費者にとっては、どこで修理してもらった方がいいのか分かりません。買った所が分かっていれば、そこへ頼むことも出来ますが、母の代から使っているとか、もらい物となると修理だけ頼む、というのは気がひけます。そこで気軽に相談や修理ができる場所はないだろうか、以前から全国的に伝統的工芸品センターに、問い合わせがしばしばあった。毎月第二水曜日の午後一時から四時まで、柴田さんは同センターの研修室で診断を行っています。柴田さんは輪島市出身の塗師家（ぬしや）。分かります。例えば漆器製造販売業といったところ。専門家の目で、まず修理すべきかどうか、修理の内容、費用の見積もりを行います。修理代は部分修理で二千元（実費）から、修理されると決まった漆器は、輪島市の技術者のもとに送り届けられます。修理には最低三カ月が必要。輪島塗の技法で行いますが、もちろん修理は他産地の漆器も快く引き受けています。

☆☆☆☆
アドバイスも

「買い替えた方が良いでしょう。買いますから、その時はそう勧めます。ここ（同センター）に陳列されている漆器を見ていたければ、値段は見当がつきますから、もちろんたれかの形見だとか、お祝いにもらったものとか、金銭的価値ではない思い出のある品物で、なるべく意に沿うようにして使います」と依頼者の立場を尊重します。しかし「今様の安い物を買って二、三年使った駄目になったから直してほしい」というのでは困るんです。漆器は塗り替えが出来る物を買って下さい」と、柴田さんは、漆器の選び方、使い方のアドバイスもします。

八月にオープンして以来三回の受け付けですが、約百二十人が相談、依頼に訪れました。

重箱を持参した三十代の主婦は「ひび、はげた角の部分修理を頼みました。一万八千円かかるということですが、買い替えるよりは安いです。それに母が使っていたものですから、なんといっても愛着がありますので」と言っていました。ほとんどの方が三、五年以上使っているという品物を持参していました。柴田さんは「長く使っていて、この物はずいぶん直したい」という物はぜひ直し

傷ついた重箱の修理の相談を受ける柴田さん（左）
東京・港区の全国伝統的工芸品センターで

「あげたい」と言います。座卓などのように持ち運びのできない大きな物は、一は東京都港区南青山三ノ木部分分がかりやすいよ、一ノ一 03-4032-460。「漆芸しばた」は写真を持参すれば相談に応じています。また月一回の受付日に来られない人、03-355-3426。

【宇佐美 恵子記者】